

展示品一覧

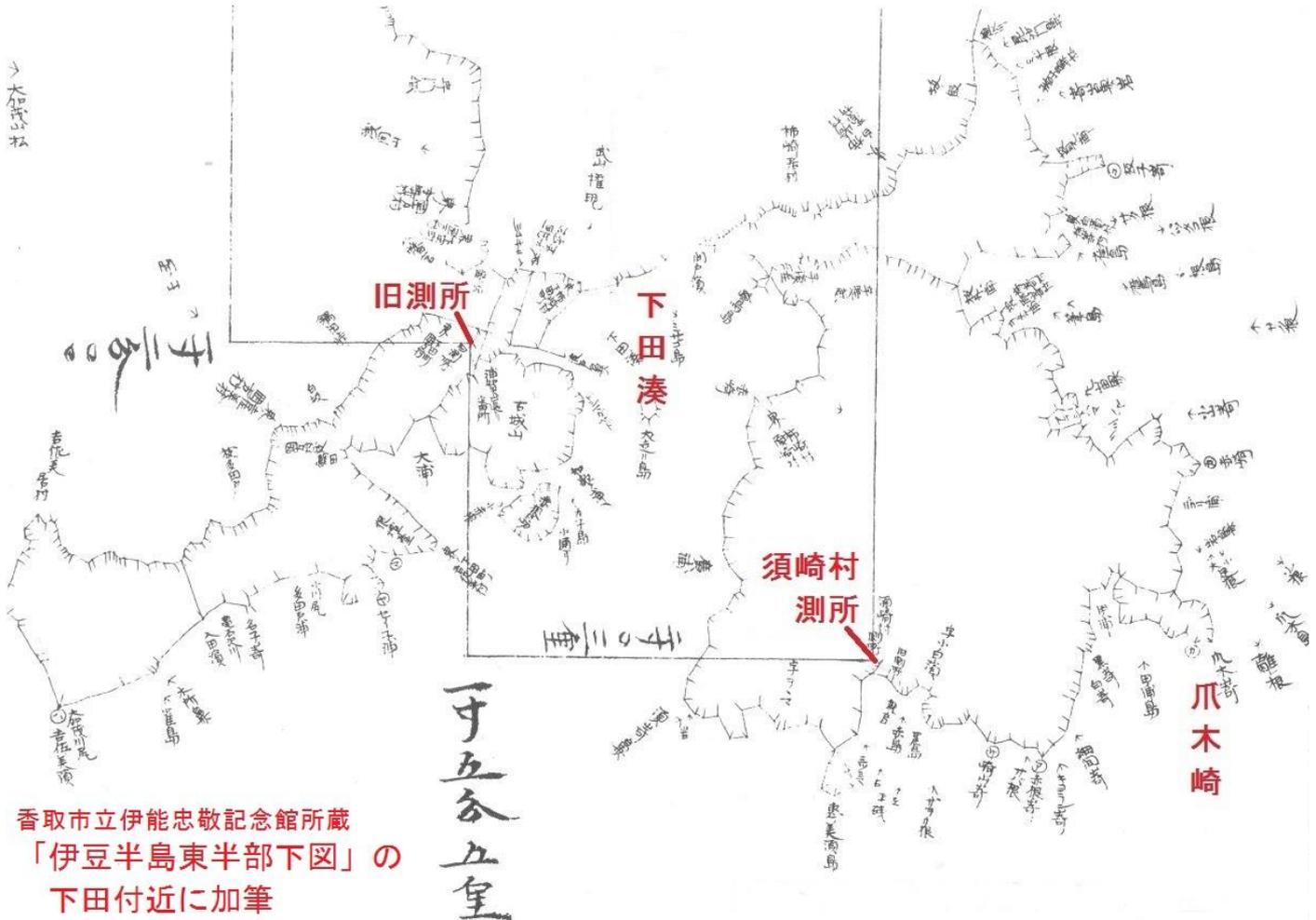
○ 下図（伊豆半島の東側半分）

「伊豆半島東半部下図」 国宝：地図・絵図類 番号273、縮尺36,000分の1、216.5×92.1 cm

この下図は、伊豆七島を測量した第九次測量の成果である。文化12年5月2日に三島宿を出立して、天城峠を越えて、5月8日に下田に着くまでの下田街道の測量と、伊豆七島測量終了後に下田から伊豆半島東岸を北上して熱海までを再測量した成果が反映されている。

渡辺一郎名誉代表は『伊能忠敬測量隊』のP269で下図の製図法について、「野帳のデータにより一測定区間ごとに、三角関数の対数表類似的な数表（割円八線対数表）により、縦軸と横軸の長さを決め、測定区間ごとの数値を累積して最終点の座標を求めた。そのあとで、始点と終点の間を区間ごとに縮尺にしたがって長さを求め、方位を合せて折れ線で接続する。」と解説している。この下図で興味深いのは、この記事の通り、区間ごとの縦軸と横軸が引かれ、その長さが、「一寸二分〇〇」「一寸五分五厘」「二寸〇三厘」「八寸七分五厘」というように、下図上に記入されていることである。

「一寸二分〇〇」の横軸と「一寸五分五厘」の縦軸の交点が「旧測所」、「二寸〇三厘」の横軸と「八寸七分五厘」の縦軸の交点が「須崎村測所」である。横軸全体の下図上の長さについては、「従小田原制札 至三島制札 二尺〇四分二厘」と、同じく縦軸の合計値については、「東海道三島宿制札ヨリ 下田町旧測所ニイタル 南四尺四寸七分五厘」と墨書している。



香取市立伊能忠敬記念館所蔵
「伊豆半島東半部下図」の
下田付近に加筆

○ 籠絵図（下田周辺）

「自伊豆国賀茂郡吉佐美村至伊豆国君沢郡三嶋宿籠絵図」 国宝：地図・絵図類 番号560

下田街道の風景をスケッチした籠絵図である。下田周辺が展示してあり「下田湊」の文字も読み取れる。この籠絵図が大図の絵画的表現を支えている。なお、展示解説では「忠敬、鳥になる」とのキャプションが付けられているが、第九次測量に忠敬は参加していない。筆が滑ったようである。

○ 大図（伊豆半島の東側半分）

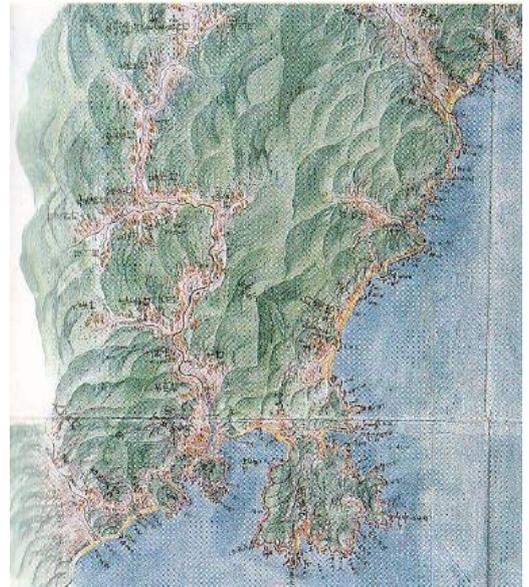
「**自豆州賀茂郡吉佐美村至相州足柄下郡小田原宿沿海地図**」

国宝：地図・絵図類 番号15、

文化13年、縮尺36,000分の1、209×96 cm

上記の「伊豆半島東半部下図」に匱絵図の要素を加えて完成した大図である。伊豆七島特別大図と同様に、内陸部まで山景が濃緑色で華麗に描き込まれている。下田街道や海岸線の測線も鮮やかである。

この大図は第九次測量の部分だけで作成されており、伊豆半島の西半分は描かれていない。第二次測量の伊豆半島の大図（伊能忠敬記念館所蔵 国宝：地図・絵図類 番号18）は一舗で伊豆半島全体をカバーしているが、内陸部は天城山以外は空白である。最終上呈版では伊豆半島北部と南部の2舗構成となった。国会図書館蔵の第101、102図では内陸の街道は描かれているが、この図のように、濃緑色の山景で埋め尽くすことはしていない。



大図から下田付近

『伊能忠敬の地図を読む』（河出書房新社）



千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵



国立国会図書館デジタルコレクション

今回の展示では、下図とは思えない迫力の「伊豆半島東半部下図」、下田付近の匱絵図、華麗な伊豆半島の東側半分の大図を並べてみる事が出来て、誠に眼福であった。ただ、昨年8月末からの企画展では、須崎村の測量データを記載した「野帳」が展示されていた。また、伊能忠敬記念館では須崎村をはじめ伊豆半島東岸の小区域下図を多数所蔵している。

同一の場所の「野帳 ⇒ 小区域下図 ⇒ 広域下図 + 匱絵図 ⇒ 大図の完成」というプロセスを一度に見たいというのは望蜀の嘆であろうか。

○ 伊豆七島特別大図（新島・式根島と神津島）

「**伊豆国附新島并属地内式根島沿海地図**」 国宝：地図・絵図類番号121 文化13年、縮尺12,000分の1

「**伊豆国附神津島沿海地図**」

国宝：地図・絵図類番号122 文化13年、縮尺12,000分の1

第九次測量の成果の特別大図が2舗展示されている。神津島の濃緑色の山容に対して朱の測線が太く引かれており強い印象を与える。また、新島の羽伏浦のまっすぐ伸びた浜辺も印象的である。海の青と、流紋岩が風化した石英などが堆積した白い砂浜と、海から一定の距離を保って引かれた測線の朱のコントラストが鮮やかである。

文化12年9月14日に測量隊は新島から利島に渡り、その日のうちに利島測量を終えた。ところが、翌15日から「高波逆風」「北風烈舟不出」が続き、20日の測量日記には、当島の水は払底し、入湯出来ず、天水の腐水を以て炊飯し、香水としたとある。翌21日に新島に帰着した。

○下図（伊豆七島の神津島）

「伊豆七島神津島下図」 国宝：地図・絵図類 番号 178 縮尺 36,000 分の 1、216,000 分の 1

神津島の下図である。縮尺 36,000 分の 1 の神津島の左上に、216,000 分の 1 という異なる縮尺の神津島を記入している。パネルで縮尺の変更の仕方について説明が有り、針穴の拡大写真もある。周辺の小島との間に交会法の朱線が確認できる。

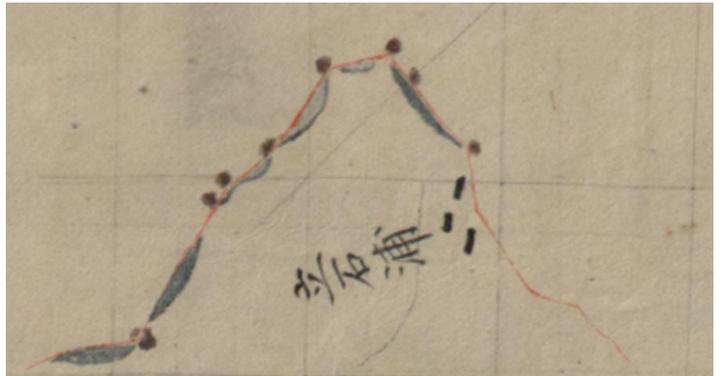
○ 大図（滋賀県余呉湖から福井県敦賀湾）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十一〈自木本／至蒲生〉」

国宝：地図・絵図類 番号 25 文化元年、縮尺 36,000 分の 1

第四次測量時の滋賀県の余呉湖付近の木本から敦賀を経て、越前海岸を北上し越前岬から蒲生までの測量成果の大図である。測量日記の享和 3 年 5 月 30 日の測量日記によると、敦賀原発の立地する立石岬周辺で「海岸舟にて長繩を用て測る」とある。また、越前測量では隊員が次々と麻疹にかかり、6 月 3 日には、病人は駕籠や舟で止宿まで送り、忠敬と伊能秀蔵の二人で測量を続けている。

この大図では領主の官職名を赤字で訂正している個所が目立つ。



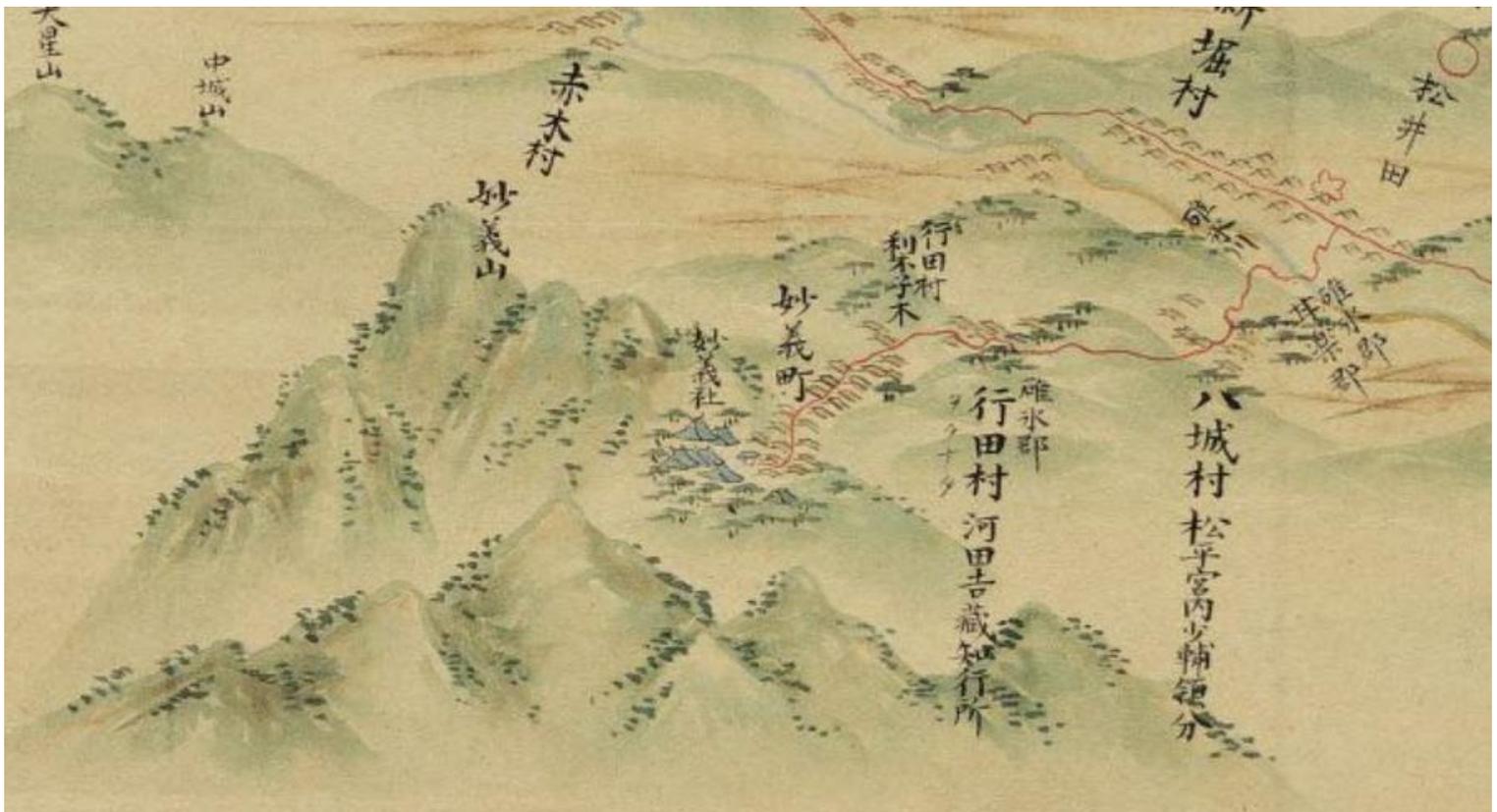
アメリカ大図第 121 号から立石岬

○ 大図（群馬県安中から長野県上田）

「越後街道図第四〈自安中／至上田〉」

国宝：地図・絵図類 番号 57 文化元年 縮尺 36,000 分の 1

群馬県の安中から碓氷峠を越えて、長野県の上田のあたりまでを描いた大図である。妙義山の険しい山様、碓氷峠越えの測線の細かい屈曲、浅間山の噴煙が目につく。国立国会図書館蔵の大日本沿海輿地全図の第 95 図で代用する。忠敬が碓氷峠を越えたのは第 3 次測量の享和 2 年 10 月 15 日のことである。



○ 伊能忠敬自筆書状（狐は食べません）

国宝：書状類番号12

『伊能忠敬書状 千葉縣史料』の所収（番号11、P19）の書簡で、東河老人（東河は忠敬の号）から娘の妙薫宛てた書簡である。解説パネルでは、「忠敬の好き嫌い」というタイトルで、忠敬の書簡に鶏肉や鶏卵がよく登場することや、それが持病の「咳嗽」に対する滋養強壮のためであった事が紹介されている。また保養のため狐の肉を勧められたが、これまで四足は食べたことが無いし、これからは食べないと断ったことを紹介している。この書状の前の部分では、忠敬は、佐原から送ってもらった「引抜ノ蕎麦」を賞味して、「大悦不過之候」としている。また、江戸と佐原の卵、雁、鶏、鴨の値段の違いを気にしており、鶏の方が鴨より「菓にて下直ニ候」とし当分は鶏肉にすると述べている。

この書状には年号が無く、文末に10月26日とあるだけであるが、文化14年のものと推定できる。

宛先が妙薫となっていることから、イネが剃髪して妙薫として佐原へ帰った文化7年以降に限定される。この件については会報38号の佐久間達夫氏の「稲は伊能忠敬に勤当されたか」を参照されたい。

書状の初めの方に、伊能家と縁の深い清宮家の家督相続の問題が記されている。これは清宮利右衛門家第八代の健彦が、父の第七代堅寧（この名乗りは忠敬が選定）より早く、文化14年5月に33歳の若さで死去したことに端を発している。その処理をめぐる内容である。

書状の中程には、間宮林蔵から玉子を合計70個もらったとある。間宮林蔵は文化8年に忠敬宅に住込みで測量技術を習い、文化14年10月11日に蝦夷地から帰着して、測量データを引き継いでいる。間宮林蔵と忠敬が江戸で直接接触したのはこの2回である。

最終段落に、橋口郁三郎を渡辺啓治郎の代わりに内弟子から画図手伝いにしたことが記されている。これは渡辺慎（啓治郎、尾形謙二郎）が文化14年に養父を亡くしたため、本来の普請役に戻されてしまい、亀嶋の地図御用所へ出役が出来なくなった。そのあとに橋口を補充し、手当がもらえるようにした事が記載されている。なお、会報54号の安藤由紀子氏の「和算の人脈（四）」を参照されたい。

○ 御用旗

国宝：器具類番号57

「御用 測量方」という文字を紺地に白で染抜く。文字は忠敬の友人で儒者の久保木清淵による。

○ 伊能忠敬自筆書状（御用旗は自作だった）

国宝：書状類番号108

『伊能忠敬書状 千葉縣史料』の所収（番号108、P150）の書簡である。この書状には宛先が欠落しているが、文末に、おりて女を初めとして家内へよろしくお伝えくださいとあることから、おりての夫、忠敬の嫡男の景敬宛と推測できる。

この書状の用件の二番目に、今回新たに作成したのぼりが4本で、合計6本になること、今回作成したものには新たに「測量方」の3文字を書き加えること、津宮の久保木清淵に書いてもらうことが書かれている。

用件の三番目は、送金してくれた7両を飛脚から請け取り、公儀から渡された正月分の手当とあわせると年内の払い方に支障が無くなり「大安心」していること。用件の最後に、送ってもらった牡蠣一樽を下役衆や内弟子に振る舞ったことや感謝の言葉が書かれている。

さて、この書状もまた「十二月十日」とあるだけで、年号が無い。ただし、用件の一番目に、「新地無尽金」について、「来暮なり、来と子ノ春も金子ニ而返済候筋宜候」とあり、年代を推定できる。書状を出した「十二月十日」は「戌」、「来暮」は「亥」、そして来々年が「子」となる。寛政2年は「庚戌」であるが、忠敬の隠居前であり該当しない。次は享和2年「壬戌」であるが、10月23日に第3次測量から江戸に帰着し、翌年2月からの第4次測量の準備中である。次の文化11年の「甲戌」には、5月に第8次測量から帰着している。書状の御用旗作成は、忠敬が参加しない伊豆七島測量や江戸府内測量のためというよりも、第4次測量に向けてのものと推測される。以上のことから、この書状は享和2年12月10日と推定できる。なお、「新地」とは伊能豊秋の次男が佐原村新地に分家した伊能幸左衛門のことである。



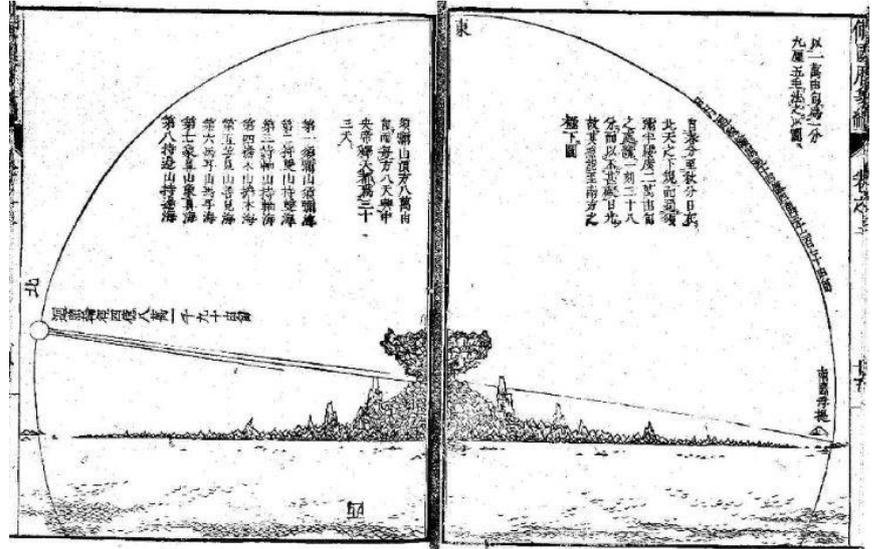
香取市伊能忠敬記念館所蔵

○ 『仏国曆象編』 (仏教的宇宙観を擁護)

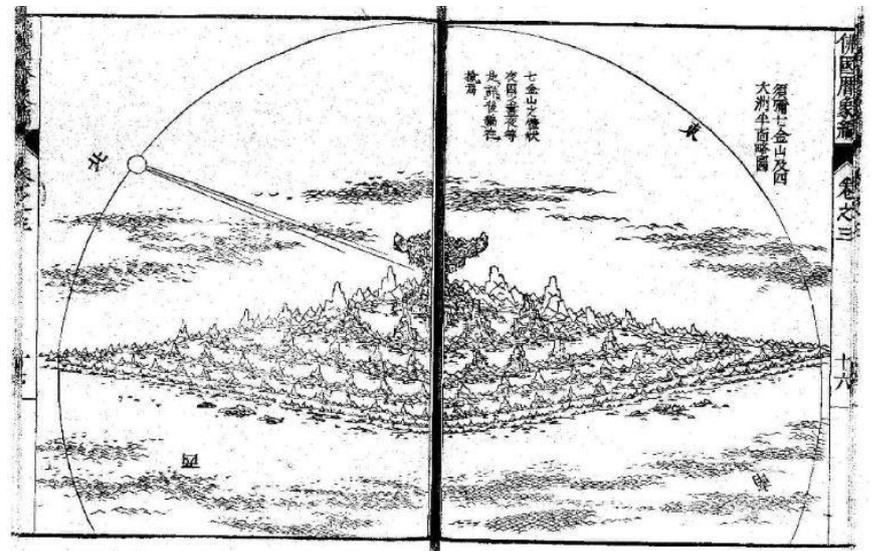
国宝：典籍類 番号109～113 积円通 撰 积智穀 校、文化7年序、5卷5冊

蘭学の勃興とともに地球球体説や地動説などを前提とする近代西洋天文学の理論が広まった。それに対し、仏教的宇宙観が否定されるという危機感を持った仏教側からは、梵曆運動と呼ばれる仏教宇宙観の擁護運動が高まった。その中心人物が天台宗の僧侶である円通（1754-1834）であり、その代表作が今回展示されている『仏国曆象編』である。

仏教界には「須弥山」説という独自の宇宙観がある。『仏国曆象編』では、世界の中央に須弥山があり、その周りに日月諸惑星が巡るという天動地平説にもとづき、西洋流の天文学を激しく非難攻撃した。なお「からくり儀右衛門」こと田中久重により須弥山儀という仏教的宇宙模型が造られている。



『仏国曆象編』3巻15頁



『仏国曆象編』3巻16頁

○ 『仏国曆象編斥妄』 (伊能忠敬の反論)

国宝：文書・記録類 番号182

伊能忠敬唯一の論文であり、漢文で書かれた稿本である。内容は円通の『仏国曆象編』に対して、逐条で「忠敬見解」を述べ反論している。「仏家誇大架虚之空説」「空論繁多」「測驗に拠らず何ぞ…論をなすか」と、実測者の立場から「須弥山」説を否定している。著作時期については、「忠敬見解」のなかに「文化十三丙子年、命を蒙り江戸図を製す」との記載があることから、文化13年10月以降に脱稿したものと推定できる。なお、『仏国曆象編斥妄』については、佐久間達夫の『新説 伊能忠敬』（大空社）に翻刻と書下し文が掲載されている。